

# 秋桜子俳句に見る「老い」

倉橋羊村

## ●同齡の追体験

いま私は「波」に「晩年秋桜子」を連載中だが、ちょうど私と同じ年齢の秋桜子の俳句と文章を追っている。

むろん人間のスケールや素質が及びもつかぬことはいうまでもないが、同じ年まわりを手がかりに、自分の生身を通して先師を学ぼうとする試みである。秋桜子没年の八十九歳まで生きられる保証はないが、命の限りこの地道の蝸牛の歩みも、本筋の評論と併行させて続けたい。

同齡六十九歳の昭和三十六年五月には、秋桜子は信州の旅に出ている。

「松本行の列車が甲信国境に近づくと、日野春、小淵沢あたりの大きな農家の門辺に、古風な武者幟が立つてゐた。けふは五月二十日、(中略)山はすべて雲にとざされ、いまにも驟雨の来さうな空模様であるが、山村はいまが忙しい最中であるらしく、人々は田畑に出て働いてゐる。桑が伸び、畦が塗られ、鋤き返されて水を張った田もすくなくない。」

甲斐駒の雲に雷をり早苗稼

国境をすぎたのち、富士見であつたか青柳であつたか、駅の近くに見事な芍薬をさかせてゐる家があつた。

山峽を抜け出た為めか、空もかなり明るくなり、ハケ岳のひろい裾野が右の車窓に傾いて、水量のゆたかな小川は、すべて波を立てつつ西に向つて流れて行く。

芍薬や遠雲ひらく諏訪平

句集『旅愁』時代から、多く試みられた俳句を伴う紀行文である。

前年の三十五年、秋桜子は「文章会」を始めた。「ホトトギス」在籍中、虚子の文章会に参加して以来、ほぼ三十年を隔てている。文章会の原始会員は、元「主婦の友」編集長の鈴木元を世話役に阿部ひろし、小野宏文、渡邊千枝子、島崎秀風と私の六人だが、秋桜子は「選後小憩」にご自分も加えて「七人」と書いておられる。

秋桜子の文章は、『高浜虚子』(27年刊)をピークとして円熟期に入っており、文章会の発足は自戒の意味もあ

大特集  
老い、  
そして人生を詠む

つたろうから、この時期の文章にゆるみはない。右の引用文を読んでもわかるとおり、文学的香気を備えた読みものになっている。

ともあれ満六十九歳は、すでに老いの部類に入ろう。秋桜子もこの引用文の先のところで、「……私達は何事もその案内に従つて居ればよい。年をとると、かういふ吟行が一番安心で楽しいのである」と、述懐している。

ところで、こうして秋桜子の晩年の仕事の展開を丹念に追っていると、思わざる暗合に出合つて楽しいこともある。私も偶然この四月に信州に小旅行することになり、秋桜子の眺めた北アルプスの唐松岳や白馬岳を仰ぐことができた。豊科在住の「波」会員有賀夜夫妻の招きで私と家内、山田貴世編集長だけの小旅行だが、秋桜子ゆかりの窪田空穂記念館にも案内してもらい、大輪敏雄館長とも面識を得た。空穂生家訪問も旅の目的の一つだった。

ついにながら私事を述べると、私が生まれたのは秋桜子の「ホトトギス」離脱の年で、秋桜子がすべての医業から離れた還暦の年に、初めてお目にかかっている。秋桜子が若い頃傾倒した佐伯祐三が最晩年に画架を立てたモランの地を訪問できたのも、秋桜子の導きといえよう。そのようにことが運んでしまうのを有難いと思うのだ。

## ●最晩年の転機

秋桜子の最晩年の転機は、八十歳から後半にかけて訪

れる。その最も顕著な現れは、筆蹟の変化に窺われる。

昭和五十三年刊の筆墨集「餘生なほ」によると、秋桜子が本格的に習字を始めたのは昭和十七、八年という。

「具合のよいことに当時娘が、藤岡保子といふ先生について勉強してゐた。この先生はお茶の水の高女を出た人で、時々三越その他で個展を開いてゐたが、実にしつかりした書法で、品格も高く、誰にきいてみても『あの人が就いて習へば申し分がない』と言はれた」と、しるされている。戦争末期の頃で、空襲で焼け出されて一時頓挫したが、八王子へ移ると、戦後は少し暇ができたので、藤岡女史の「いろは」と「奥の細道」を手本に練習を再開した。藤原行成の「和漢朗詠集」も入手できて、端溪の硯と、二、三の名墨を揃えて、いよいよ本格的に習字を勉強するようになった。

今日、巷間で目にふれる秋桜子の色紙短冊は、戦後のこの時代以後に書かれたものが多く、行成に学んだ書体の特徴があり、例の「和漢朗詠集」の影響がつよい。

短冊の天が大きく空いているのは、書道の指導者の助言に従つたためで、二行書きの短冊も少くない。

ところが、八十歳を越える頃から、書体にはつきり変化が現れる。書法は全体的にやや太書きとなり、時には字のかすれるのも恐れず、つよい筆勢で一気に書きおろす形になってくる。それまでの慎重で、形を整える筆づ

かに較べると、おどろくべき変化だが、実はそこに晩年の自在な心の働きが窺われることに注目せねばならない。その心のあり方は、単に技術面にとどまらず、晩年の創作活動の根源を形づくっている。俳句や文章の表現にも、おのずからつよく影響することになる。

## ●俳句の新領域と深まり

俳句では、自在心の現れとして「面白い俳句」と作者自身のいう新領域の開拓を試みている。いうところの面白さは、通俗に目を向けることでなく、江戸っ子風の洗練された境地へも、自在に踏み込もうとしている。

陳さんの処方の験や牡丹の芽

切り風や関の弥太つべ旅いづこ

頼つつむ敬老の日の蒸タオル

などは、新しい素材を取入れたもの。第一句の漢方の処方、第二句の股旅ものの関の弥太つべ、第三句の敬老の日の蒸タオルなど、意表をつく主題が扱われている。

わが丈の甚平垂れぬ衣紋竹

化粧塩打つたる鰯や鮎見事

神田明神 飴随一の七五三

では、第一句の甚平など、在来ならばこういう形では詠まなかったろう。第二句の座五の止め方も、思いついた表現といえる。第三句の「飴随一」も、この言い方が神田っ子らしく面白。

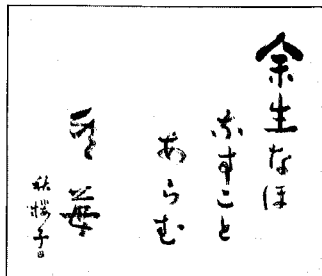
第四句は、昼の月のしらじらとした「一痕」が、淡くも濃くもなく、晴れた冬空に浮かんでいる。時空を超越した永遠の風景といってもよい。茶の花日和のおだやささが、一句を包んでいる。空に月が残っていること自体が、幻のようでもある。作者の心境のこの上ない静まりが、おのずから伝わってくる。俳句から、あたたかい表情の顔施を受けるような思いといつてよからうか。

秋桜子の美意識の究極は、これらの句を読むと、日常次元から浮揚して、一種の縹渺たる世界や、心の和みの境地へ届こうとする如くである。

文章の上でも、八十四歳の折、「馬酔木」五十一年三月号から起筆連載した「夜明けを待ちて」は、書き流す自在さが加わり、従来の磨きあげた典型美よりややはみ出す趣きがある。自然な流露感の伝わってくる親しみが忘れられない。

夜明けの一時間ほどのことを、序に書いている。

「暁の光は西側の戸の透き間からはいつて来る。東側の戸はすぐ頭の上にあるけれど、ここからの光はかへつてわかりにくい。専ら西側の光を



昭和50年、82歳の頃の書。

いずれも自在な表現が秀でているところ、筆勢の変化と対応している。今までにない面が、姿を見せている。

こういう新機軸だけでなく、従来の作風にも奥ゆきの一層の深まりが見える。少し例を挙げてみよう。

飛ぶ雲の浮べる雲となりて木瓜

水羊羹喜劇も淡き筋ぞよき

頼家もはかなかりしが実朝忌

茶の花や月一痕の日和にて

内容に応じて、叙法にもそれに相応しい展開が見え、柔軟な句風が編み出されている。

第一句は、雲の動きの変化から、風のやむ気配が窺われ、下五の「木瓜」の動かぬ印象が、みごとというほかない。

第二句は、喜劇の筋立ての軽妙さを望ましいものとした上で、「淡き」という措辞で、さらに微妙な呼吸を求めている。しつこい上方喜劇は、秋桜子の肌に合わない。配するに「水羊羹」の季語がすっきり収まる。

第三句のさりげない述懐は、実朝忌を主軸に置きながらも、頼家を引合いに出すことによって、両者のぬきさしならぬ対比を印象づけている。「頼家もはかなかりしが」が絶妙なフレーズとなって、二人の生涯の悲劇性をモノローグの形で重ね合わせて見せる。それぞれの違った悲劇的生涯を、巧みに書き分けたともいえよう。

たよりにしているのだが、二つある電燈の笠の一つがまづ見え、それから三、四十分たつともう一つの笠が見える。両方ともはつきりするとたいいてい六時半頃で、時にはまたそれから一眠りといふこともあるが、たいいていはそのまま眼を開いてある。夜通し暖房にしているから、明け方の寒さで閉口することはない。

目を覚ましてからの一時間については、俳句を詠んだり、文章の構想を練ったりすることが多いという。

「しかし、俳句を詠むには汐どきがあつて、だめな時は絶対だめだから、いけないと思つたら未練なく止めて、文章の構想にとりかかる。これは俳句とちがつて、汐どきとあまり関係がないので、たいいていは成功する。私の書くものなど、短いことから、時には文章のこまかいところまで頭の中で出来てしまふ。それだからいざ執筆となれば進み方が早いのかもしれない」

丁寧な順を追って書いているが、読者のイメージに訴える工夫がなされているので、読んでいて疲れない。電燈の笠が一つずつ視界に浮かびあがってくる描写など、読むリズムを考えて呼吸を合わせている。それが計算ずくでないから、読む側でも自然に乘れるのだ。流れに巧く任せるところに、秋桜子の老いの実体が透けて見える。繰返すと、それが最も見易く書体に現れたのである。